

Title	朝鮮本『増続会通韻府群玉』四種：『韻府群玉』版本考補正
Sub Title	The additional report for the comparative study of printed edition of the Yun fu qun yu: a description of 4 Korean edition of the Zeng xu hui tong yun fu qun yu
Author	住吉, 朋彦(Sumiyoshi, Tomohiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2006
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.91, No.1 (2006. 12) ,p.167- 199
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	関場武教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00910001-0167">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00910001-0167</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 朝鮮本『増続会通韻府群玉』四種

— 『韻府群玉』版本考補正 —

住吉 朋彦

中国元代の処士、陰時遇（字時夫）・幼達（字中夫）の兄弟によって編集された類書『韻府群玉』は、十四世紀以降の東アジアに広く流行し、高下の学問や文藝に深い影響を与えた。本書はいわゆる韻書の形式に類書の内容を盛った編集で、古今の事実や詩文の要処を選び、その中からさらに要語を標出して、漢語の音韻、即ち四声以下の一東より始まる韻母に従い配列した、字句検閲のための書物である。本書の受容が広がったことは、版本伝来の有様に最も明らかで、私に確認し得た限りに於いてさえ四十種が見出され、版の補修や移譲等により、印出の様相を異にする亜種や変種まで勘案すれば、なお一層、多岐に亘っている。本書版本の全容について、既に柳田征司氏の論文『玉塵』の原典『韻府群玉』について」（山田忠雄氏編『國語史學の爲に』昭和六十一年五月・笠間書院、『室町時代語抄物の研究』（平成十年・武蔵野書院）に追補再録）があるけれども、稿者もその驥尾に附して『韻府群玉』版本考（一）—（五）」（『斯道文庫論集』第三十五—三十九輯、平成十三年—十七年二月）を記し、いまだ不完全ながらその解明に努めて来た。

変化の著しい『韻府群玉』の諸本のうち、題目に「増統会通」と冠称する一群の伝本がある。これらは、先行する元末の増補本『新增説文韻府群玉』を基に、明代の学官包瑜によって輯められた統編『類聚古今韻府統編』をも割入し、より広範の記事内容を備えている。この増統会通本を、個々の伝本につき検討してみると、近代以降の流転により例外を生じているものの、殆ど全て現在の韓国と日本のみに伝存し、中国には在来の伝本が認められない<sup>1)</sup>。またその版本間の関係を考えると、日本で行われた和刻本の延宝三年（一六七五）刊本は、半世紀ほど先行する寛永二年（一六二五）古活字刊本を覆刻したものであり、もとの古活字本はさらに、朝鮮刊行の活字本である乙亥字本に依拠していたことが判明する。即ち『韻府群玉』の増統会通本は、中国の増補本と統編を会通し、当初朝鮮朝に於いて行われ、のちに近世の日本に将来されて、再次複製された本文ということになる。この間の事情について、既に『韻府群玉』版本考（五）（『斯道文庫論集』第三十九輯、平成十七年二月、以下前稿と略称）を記し詳述した。

『増統会通韻府群玉』の朝鮮本は乙亥字本を根源とするが、これに組成の異なる前後二種の伝本が認められる他、崇禎再丁酉年（一七一七）校書館刊行の戊申字本を存し、また是より先、西暦の十七世紀中に刊行されたと思しい訓練都監字（以下訓監字と略称）本をも伝存し、合計で四種を数えることができる。これら四種の関係について大略を述べる<sup>2)</sup>と、まず乙亥字本二種のうち後出の者は、前出の本に基づきながらその本文に整訂を加えた別本に当たる。この乙亥字後出本は、日本の建仁寺両足院に蔵する完本によって、その全容が明らかである。また戊申字本、訓監字本の二種は、どちらもこの乙亥字後出本に基づいたものと認められ、戊申字本が忠実にこれを複製したのに対し、訓監字本は、乙亥字後出本にさらなる増編を加える一方、平声の韻によって通押することが一般的であった韻事の実情に鑑み、上声以下仄声の部分は全て割愛してしまった増刪本である。これら朝鮮本四種の伝存状況につき、稿者の行った調査の範囲で考

えると、乙亥字本は早く日本に伝わっていたことが明らかであり、これは日本の寛永二年古活字刊本が乙亥字本に基づいていることも符契を合している。一方、残りの戊申字本、訓監字本の二種については現在韓国に伝わる本が殆どで、近世以前の日本への伝来は認められない。<sup>3)</sup>

以上は大略、前稿に述べた事柄の摘要であるが、成稿後、本書成立に関係する記事を徴することができた。またさらなる伝本調査の進捗によつて当該本四種の著録が補われた結果、前稿では記述の及ばなかつた細情が明らかになる一方、版本学的把握に誤りのあつたことも明らかになつた。具体的には、日本の前田育徳会尊経閣文庫蔵本と、韓国の高麗大学校中央図書館晩松文庫蔵本の調査を果したことにより、朝鮮本四種のうち、乙亥字初印本、訓監字本の完全な姿がほぼ明らかになり、種々補正の必要を生じたものである。なお前稿の誤りについては、いずれも稿者の迂闊に原因する。以下、成立に関する記事を挙げて若干の考証を加えた上、版本の解題を補正し後考に備えたい。版本の記述に当たつては、前稿との重複を最小限としつつ四種の解題を繰返し、補正すべき点の小括に続き、前稿以後に著録し得た伝本の様相を列記して、その根拠を標示した。

朝鮮中宗朝の政務を記した『中宗実録』三十九年（一五四四）八月五日辛未条に、大護軍李希輔の上疏を引用し、次の文章を載せている。

（上略）不意黄髮殘年、謬忝撰粹羣玉之任。自受 命以來\*、夙夜憂懼、忘寢廢食、考正其舛謬、刪定其重複、詳於彼者略於此、著於前者刷於續。自去年春、至今年仲秋、未嘗一日休息、竭力盡心。以冀成編、故欲不負國家委任

之意。不幸勞瘵內構、百疾外作、加以年踰七十、氣力衰倦、精神昏耗。每撰古人一傳、錄古人一迹、再三伸卷復觀、姓氏旋又忘失。又以韻府續編之書、皆唐本也、字極細微、又多訛僞。雖竭精殫慮、眼生黑花、心昏勞翳、味昧然一字變爲三四。強而行之、必發狂疾、恐負 聖明委任責成之望。(下略)

\* (原注) 韻府羣玉有前集、續集。故刪定新增事、癸卯春、大提學成世昌啓請、希輔撰集。

(上略) 思いがけず、老いの身の晩年に「群玉」編集の任を忝なくしました。命を受けてよりこの方、早朝より深夜まで憂い懼れ、寝ることを忘れ食べることも止め、その誤りを考え正し、その重複を削り定め、あちらに詳しきはこちらに省き、前に明らかな点は続編に除き、去年の春から今年の八月まで、いまだ嘗て一日も休むことなく、力を尽し心を碎いて参りました。編集の完成を願うからこそ、国が(私を)任じたその意に背かないよう心がけたのです。(しかし)不幸にも疲労が体内にわたかまり、病気が体外に現れ、そればかりでなく歳は七十を超え、気力は衰え倦み、精神は惑いくたびれてしまいました。古人の伝一編を述べ、古人の事跡一章を録するごとに、二度三度と書物を繰ってはまた見かえし、名字も行き違いました。忘れてしまう始末です。また「韻府統編」の書は、どれも唐本でありますために、字は大変に細かく、また誤りも多くあります。精魂を傾け思慮を尽しても、眼中に黒い花びらが舞い、心は塞がり眼病を患って、目の前は暗闇同然で一字が三、四字に見える有様です。強いてこれを行えば、必ずや狂疾を起こし、恐らくは大王殿下のご委任と、成功を促されるご期待にも背いてしまうことでしょう。(下略)

\* (原注) 「韻府群玉」には前集と続集がある。そこで刪定新增する事を、癸卯の年(中宗三十八年)の春、大提學の成世昌が啓をもって、(李)希輔に撰集させるよう(中宗に)請うた。

中宗に右の疏を奉った李希輔は、字伯益、安分堂と号す。平壤の人。成宗四年（一四七三）生。燕山君七年（一五〇一）に文科及第しその寵臣となる。中宗朝に学官を歴任し、大護軍僉中枢府事に至る。明宗三年（一五四八）歿。この疏、古の君主の委任責成は臣下の力量を測つて処するもの、臣の如き非才はその任に充分ではございませんと、冒頭から逃げ腰で、引用部に、思いがけず老身に「群玉」撰集の命を受け、一年間尽力したものの、体力精神力ともに伴わず眼病を起こし、このままでは狂疾すら発し、大王の期待に背きかねないと訴える。さらにこの後、齡九十の母鄭氏は病の床に着き、明日をも知らない命だと続け、撰集の榮譽を辞するのは一重に学問の停滞を恐れるからだと弁明し、大王の寛容にすぎり任務の転嫁を願ひ出たものである。この儀は大提学への諮問に附する処置となっており、その後の顛末は不明である。大提学とは、右の原注にあるように成世昌のことであるが、成氏は前年に当たる中宗三十八年（一五四三）癸卯の年に、李希輔による撰集を發議した当人であつた。

この『韻府群玉』の撰集がどのような作業であつたかを考えてみると、李疏に「考正其舛謬、刪定其重複、詳於彼者略於此、著於前者刷於續」とあるのが実情を示しており、単なる校訂ではなく重複を削ると言っているから、別種の本を照合したのである。その本文とは、原注に言う「前集」と「続集」がこれに当たつていよう。従つて原注の「刪定新增」とは、「詳於彼者略於此、著於前者刷於續」と、続集の前集に重なる点を取り除き、新增の本を成すことがその内容と見られる。つまりこの記事は、本稿に取り上げる『増統会通韻府群玉』の編集過程を説明したものと考えられる。このことは、続集について李疏中に「韻府續編之書、皆唐本」と、即ち明刊本『類聚古今韻府統編』と言明していることによつても確かめられる。また現存の増統会通本に拠ると、統編部分の底本が明正徳十二年（一五一四）刊行で、乙亥字後出本に存する宣賜記の年次が隆慶二年（一五六八）であり、該本の編集はこの間と考えられること、李氏刪定の

様子が現存の本文に相応しいこと等、後述の乙亥字本の実情に照らしても符節を合している。

李希輔による増続会通本編集の作業は、この後如何にして続行されたのか、『中宗実録』の記事は、李氏が暗主とされる燕山君鍾愛の妓女のために挽歌を作り、「此吾之李太白也」と称えられ恩寵を受けたことや、その他の悪評を取り上げて李氏の「諂邪之資」をあげつらい、この度も任務を逃れようとするのを責めるのみであって、その後の消息を記していない。ただ李氏は自らの疏に「況撰集之任、朝家所榮、今又事功已半。若勉不怠、以卒其業、則掛名卷端。自托不朽、其又奚辭。」(ましてや、撰集の任に与ることは朝廷の榮譽とする所、今その仕事も半ばを終えているのです。もし励んで怠らず、そのまま作業を終えたなら、書物の巻頭に名を掲げることができましょう。我が名を不朽に遺そうというのに、それをへ大きな理由もなく) どうして投げ出すでしょうか。)と弁じており、実際の伝本を見ると、巻頭どころか李希輔の名は全く没してしまっているから、李氏の懇願が容れられ、編集事業は他の学官の手に委ねられたのではなからうか。しかしいずれにせよ、中宗三十八年春から翌年の八月に掛け、主に李氏が『増続会通韻府群玉』の編集に関与していたことは疑えないであらう<sup>5)</sup>。以上の事柄を踏まえ、版本に関する前稿の記述を補正する。

増續會通韻府群玉三十八卷

元陰時夫編 陰中夫注 闕名增 明包瑜續 「朝鮮李希輔」會通

朝鮮刊(乙亥字) 據明弘治刊新增説文本・續編明正徳十二年刊本

卷首題「増續會通韻府群玉卷之一(一三十八)」(卷十一「下平聲<sup>(陽)</sup>」)、卷二十六至二十九、三十一至三十二「去聲<sup>(陽)</sup>」、

卷三十三至三十八「入聲(同)」首題下標目、次行以下低五格「晚學 陰 時夫 勁弦 編輯 / 新吳 陰 中夫 復春 編註 / 青田 包 瑜 希賢 續編」(第二十四行は首のみ)、次行低二格「二東へ獨用」等韻目、次行より本文。先ず大字単行にて「(東)」等と字目を標し(同音字の首のみ墨囲)直下より注、小字双行。先ず反切(同音字首のみ)、次で字義を例証し(墨囲、説文のみ墨囲陰刻)(引書目前掲)(標出字「一」格代号)、直下に大字単行にて「道東」等熟字、直下より注、小字双行(体式同前、但し引書目後掲)(以上、新增説文本)。又大字単行にて「續陽陰」と標し、直下に「賦河東」等と熟字を示し、直下より注、小字双行(体式同前)(以上、続編)。又「活套(墨陽)」等と特殊語彙の類目を標し注、小字双行。間々続編の補入あり。異音字間圈発隔、毎韻改行。毎字の首行欄上に当該の字目を標出注記するも、間々欠く(図版一)。

第一卷(五四張)	上平声 一東	※	第九卷(五七張)	十四寒・十五刪
第二卷(四〇張)	二冬・三江	*	第十卷(五五張)	下平声 一先
第三卷(九七張)	四支	*	第十一卷(五五張)	二蕭・四豪
第四卷(六一張)	五微・六魚	*	第十二卷(六〇張)	五歌・六麻
第五卷(七七張)	七虞	*	第十三卷(九五張)	七陽
第六卷(七四張)	八齊・十灰	*	第十四卷(七〇張)	八庚
第七卷(五〇張)	十一眞		第十五卷(三〇張)	九青
第八卷(六五張)	十二文・十三元		第十六卷(二五張)	十蒸

* 第十七卷(七四張)	十一	第二十八卷(四八張)	八齋—十卦
* 第十八卷(六〇張)	十二侵—十五咸	第二十九卷(八一張)	十一隊—十六諫
第十九卷(九九張)	上声 一董	* 第三十卷 (五九張)	十七霰—二十號
第二十卷(八五張)	五尾—七麌	第三十一卷(七〇張)	二十一箇—二十四敬
※ 第二十一卷(五五張)	八齋—十三阮	第三十二卷(四六張)	二十五徑—三十陌
※ 第二十二卷(五九張)	十四旱—十八巧	* 第三十三卷(七七張)	入声 一屋・二沃
第二十三卷(六三張)	十九皓—二十一馬	* 第三十四卷(六一張)	三覺—五物
* 第二十四卷(四二張)	二十二養—二十四迥	* 第三十五卷(四〇張)	六月—八黠
* 第二十五卷(六四張)	二十五有—二十九賺	第三十六卷(六八張)	九屑・十藥
* 第二十六卷(六九張)	去声 一送—四寘	※ 第三十七卷(六四張)	十一陌・十二錫
第二十七卷(五一張)	五未—七遇	※ 第三十八卷(七八張)	十三職—十七洽

四周双辺(二三・五×一六・一横) 每半張一〇行、毎行一八字。乙亥字、稀に木活字を交える。また「續」「活套」等、本書に必要な特殊活字は木製と思われる。中縫部白口、双花口魚尾(向不對) 問題「群玉幾」、下尾下張數。巻尾題「増續會通韻府群玉卷之幾」。

本版の第十、十二、十四、十七・十八、二十四—二十六、三十、三十三—三十五の十二巻については、前稿までその伝本に接していなかったため、\*号を冠し、今回新たに細情を掲出した。また第六、八、九、二十一、二十二、三十七、

三十八の七巻について、前稿までに属目の伝本では、末尾を欠く等問題を残していたため、十全を期することができなかったが、今回※号を冠し、記述を改めた。

〈尊経閣文庫 雑部類纂類一〉

三五冊 附一冊

卷三、十六配同刊〔通〕修本 金沢学校印記

後補黄檗染表紙(二三・〇×二二・二種)左肩打付に「韻府羣玉へ幾之幾」と、右肩より韻目、右下方綫外に「承三十五」と書す。押し八双あり。五針眼、改糸、虫損修補。第一・二、十一・十二、十五・十六巻を各一冊に収める他は、毎冊一卷。第五巻第二十張を欠き、白紙を夾んで匡郭界線のみ鈔補。第八巻第二十二至二十張錯綴。第二十六巻第六十九張の紙背に方形陽刻の朱文による朝鮮朝の公印影を存す。朱筆にて欄上字目に標点、本文に豎点を施す。稀に欄上に墨補注を加う。附冊あり、素表紙(三一・八×二〇・五種)左肩黄檗染題簽を貼布し「韻府羣玉へ第五巻落張一枚之分」と書す。袋紙縫綴、本文斐紙。前見返し貼紙「此寫何とそ致了見落張一枚え書合候様ニ可被仰付候其段難成候ハ、先其分ニ而被添置同板ノ之韻府羣玉借出落張之分一枚写申様可被遊候以上(格三)二月三日」墨識。本文、後半張より本冊と行款を同じくする別本を摸写し、本書第五巻、上平声七虞韻中「挿莢」項の途中、次で統編の「賦茱萸」より次張の後半第二行に及び「紫琳腴」項に至る。張付を見ると第十八張の後半より第十九張の後半第二行に至る。その本文には、本冊の第五巻第二十張の欠を補って若干の餘りがあり、排字は均しくない。また改張し本文、別本を摸写し、第六巻、上平声十灰韻中の統編「明日催」項の途中、次で「青子莫相催」より「二李四崔」項見出しに至る。張付によると第四十六張後半に当たっている。本冊第六巻に欠はないが、比較すれば、やはりこれも排字を均しくしない。後見返

し貼紙、前見返しと別手にて「増續韻府第五卷第二十葉之脱簡校吉村宗信之／本以其別版故涉二葉因而各摹半面又第六卷第／四十六葉亦闕宗信之本有言句多少復寫其半面／合為一冊子姑附之家本以俟異日云／ 壬寅仲春上旬識于江都寓居」墨識あり。附冊を含む毎冊の首に単辺方形陽刻「金澤學校」朱印影を存す。

該本は旧藩以来の儲蔵と思しく、書入や附冊は近世の所為である。前表紙見返しの識語は、この附冊または別の「同板本」によつて、本冊巻五の欠張を鈔補すべく勸めてゐる内容で、その口吻は主君に対する懇請の如くである。後表紙見返しの識語はこれに先立ち、某年壬寅江戸の邸宅に於いて、吉村宗信なる者の蔵本を以て校し、「別版」である故にこれを別添とし、他に気付かれた卷六の異同ある箇所を、さらに附録して一冊を成した由を記してある。附冊の主体者、年次を明らかにできないが、これを「家本」に附すと云つており、前田家当主の手跡と思われる。記して後考を俟つ。附冊の分、版式字様は本冊と酷似するのに、排字が合致しないのは、後出の、本文に増刪を伴う別本によつて比較を試みたために、不整合を生じたのである。摸写本文の性質については、後に考察したい。

又 「通」修

該本は巻首以下異植字の、後出の別本で、これには完全な形の建仁寺両足院蔵本を存するため、前稿に詳しく記述することができた（図版二）。但し前稿では、同じ乙亥字による異植字本であり、また本文の増刪によつて、行款を同じくするのに排字を異にしているため、乙亥字再刊本と著録した。しかし初印本については数部の残本のみにより、特定部分の比較に基づいて著録したため見落とした点があり、前記の如くほぼ完全な形の尊經閣文庫収蔵本を得て比較してみると、再刊と称するのは適正でないことが判明した。即ち、両者が全くの異植字の關係にあるのは卷十までに止まり、

卷十一以降の諸巻では、基本的に植字を同じくすることが明らかになった（図版五・六）。従つて両足院本は、尊経閣本に対し後修の関係にあることとなる。今比較参考のために、後修本の張数と分属を重ねて掲出する<sup>6</sup>。

第一卷（五四張）	上平声 一東	第十五卷（三〇張）	九青
第二卷（三九張）	二冬・三江	第十六卷（二五張）	十蒸
第三卷（九四張）	四支	第十七卷（七四張）	十一尤
第四卷（五八張）	五微・六魚	第十八卷（六〇張）	十二侵——十五咸
第五卷（七二張）	七虞	第十九卷（九九張）	一董——四紙
第六卷（六九張）	八齊——十灰	第二十卷（八五張）	五尾——七麌
第七卷（四九張）	十一真	第二十一卷（五五張）	八齊——十三阮
第八卷（六一張）	十二文・十三元	第二十二卷（五九張）	十四旱——十八巧
第九卷（五三張）	十四寒・十五刪	第二十三卷（六三張）	十九皓——二十一馬
第十卷（五三張）	下平声 一先	第二十四卷（四二張）	二十二養——二十四迥
第十一卷（五五張）	二蕭——四豪	第二十五卷（六四張）	二十五有——二十九謙
第十二卷（六〇張）	五歌・六麻	第二十六卷（六九張）	一送——四寘
第十三卷（九五張）	七陽	第二十七卷（五一張）	五未——七遇
第十四卷（七〇張）	八庚	第二十八卷（四八張）	八霽——十卦

第二十九卷(八一張)	十一隊—十六讀	第三十四卷(六一張)	三覺—五物
第三十卷 (五九張)	十七霰—二十號	第三十五卷(四〇張)	六月—八點
第三十一卷(七〇張)	二十一箇—二十四敬	第三十六卷(六八張)	九屑・十藥
第三十二卷(四六張)	二十五徑—三十陷	第三十七卷(六四張)	十一陌・十二錫
第三十三卷(七七張)	入声 一屋・二沃	第三十八卷(七八張)	十三職—十七洽

このうち卷一より卷十までは、異植字であるばかりか本文そのものを削っているから、初印本に比べ軒並み張数も減っている。卷一のみは張数が同じであるけれども、第十八張の末行、上平声一東韻「宮」字の続編の首より、後修本が「闕宮」の項を削ったために数字分の狂いが生じ、以下の排字は僅かに異なっている。卷十一以降は同植字であるから、当然張数も初印時に等しい。後修本が卷十までの間に本文を削っているのは、主として本文の整わない点を抹消したためである。この操作については前稿にも述べたが、例を変えて再説したい。

第一卷、上平声一東韻「宮」字項の異同について考えてみると(図版三・四)、後修本は初印本にあった「闕宮ヘー有価(魯頌)」の項目を削っているが、この項目は「續(刻除)」の黒牌を冠することからもわかるように、続編部分の先頭に当たる。ところで本書『増続会通韻府群玉』は、基本的に『新增説文韻府群玉』と『類聚古今韻府統編』を合した内容である。即ち、前者の毎字の後に「續」の符号を置いて、その後に後者の同字項目の記事を割り入れたのである。但し、前者新增説文本で毎字の末尾に附される「活套」「詩篇」「姓氏」等、特殊語彙等の附録部分は、増続会通本でも続編部分の後に置かれた。合編される前の新增説文本の「宮」字項を見ると、熟字として「青宮」より「蜥蜴守宮」に

至る二十五項を掲げ、次で「詩篇」「人名」「姓氏」の諸項を附してある。また続編の「宮」字項を見ると、「閔宮」より「陰禮教六宮」に至る七十九項を録している。これを合編された増続会通乙亥字初印本に見ると、新增説文本の二十五項全てを録し、「續」の標示後に、続編のうちの四十三項を掲出して、最後に「詩篇」以下の、新增説文本の附項を置く形である。つまり増続会通本は続編の全てを録するのではなく、原編の冗漫を避けて煩雑未整の項を削る他、「南宮」「東宮」「青宮」等、新增説文本と重なる熟字については、記事諸共にこれを略している。これは合編者李希賢の上疏に述べてあつた事柄ともよく合致している。さて、後修時に省かれた「閔宮（ヘー）有恤（魯頌）」の項は、新增説文本に挙げられていない項目であるから、当初は増続会通本もこれを除かなかつた。しかし本文を仔細に眺めると、新增説文本の附項である「詩篇」中には「閔一頌、僖公能復周公之宇也（魯）」とあつて、『毛詩』魯頌、駟之什の「閔宮」篇の名および小序が挙げられており、続編の首に置かれたのは同篇名およびその初句であるから、彼此重複していることになる。恐らく乙亥字本は、新增説文本附録「詩篇」の項が後置されたために、初めはこれに気付かず印出したが、後修時までには重複が判明したため、編集方針を徹底する形で、その項目が続編部分から節略されたのであろう。

右のように、後修本に於ける張数の減少は、さらなる整訂に伴う本文の縮小に連動していたが、さらに次の二点について僅かな異同がある。第一に、巻首題下に加えられる声目の有無に相異なる点がある。後修本では巻一、五至六、八に「上平聲（陰刻）」、巻十一、十三、十八に「下平聲（同）」、巻二十至二十三、二十五に「上聲（同）」、巻二十六至三十二に「去聲（同）」、巻三十三至三十八に「去聲（同）」の声目が標示される。これを要するに、巻一より二十五までは間欠的に、去声の首である巻二十六以降は全巻の首題下に、墨圈陰刻の声目牌記を存する。初印本に比べると、上平聲は全く新たに補い、下平聲は巻十一に、もと陽刻の標記があつたのを陰刻の牌記に変え、さらに巻十三より上声の卷々

に及ぼし、去声では前本に欠く卷三十にも標目を加えて全卷に附し、入声では前本の如く、全卷に附した形を継承した。これらの標目について植字の異同を見ると、卷十一を除き初印時と重複するものは、同一の木活字によっている。しかし卷十一、十三、十八、二十一至二十三、二十五、三十については新たに補われたのだから、卷十一以降にも補修の加わっていることが指摘される。第二に、しばしば欄上に注記されている字目について、初印本には間々これを欠き、或いは標出の位置を誤っていたのを、後修本では、全てではないが補正している。但し卷一より十に至る間、本文の縮小に伴って欄上の字目も行を正さなければならぬ所を放置したことから、後修本にはかえって行を誤り、また注記を欠く結果となっている例もある。この字目の補正は卷一に集中して見られるが、後の卷、卷十一以降にも数卷に一箇所程度の割合で見られ、一応修正の全卷に亘っていることが看取される。ここでは卷一、卷十一の例に限り、次に表示する。後説の都合上、日本の古活字本の形も附載する。

(卷・声) (韻目) (字目) (乙亥字初印本) (乙亥字後修本) (古活字本)

第一上平 一東 [同] 第3張後半2行(誤) 第3張前半第10行(正) 同(正)

[熊] 第22張後半4行(正) 同(誤) 同(誤)

[楓] | 第30張前半第3行 | 第30張前半第10行

[豐] | 第30張前半第7行 | 第30張前半第10行

[澧] | 第31張前半第3行 | 第31張前半第10行

[鄂] | 第31張前半第4行 | 第31張前半第10行

第十二下平二蕭

[蕭]		第1張前半第3行	
[虹]		第45張後半第10行	
[權]		第43張前半第10行	
[隴]		第43張前半第9行	
[籠]		第41張後半第2行	
[夢]		第41張前半第1行	
[工]		第38張前半第8行	
[空]		第32張前半第1行	
[露]		第31張後半第10行	
[籜]		第31張後半第9行	
[癢]		第31張後半第8行	
[隆]		第31張後半第4行	
[琬]		第31張後半第3行	
[恍]		第31張後半第2行	
[充]		第31張前半第7行	
[颯]		第31張前半第6行	
[薑]		第31張前半第5行	

卷一に關してはさらに、前稿（二八五頁）に述べた如く、本文中の誤文につき印出の後に料紙を切り貼りし、同種活字によつて正文を鈐印する方法で校改を加えているから、卷首には殊に校正が嚴密であつたことが知られる。この後修本につき、改めて版本的把握を試みると、本書乙亥字初印本の卷十以前について、匡版を改め再植字する形で再刊し、その際にはさらなる本文の整訂が加えられ、毎卷の字数は若干縮少した。一方、卷十一以下はもとの植字をそのまま生かし、前後を繼いで印行することになった。またこれとは別に全卷に亘つて、不徹底な形ではあるが、卷首題下の声目の整備と、欄上字目の補正が加えられたのである。さらに印出の後、貼紙校改も施されたのであつたが、それではこれらの改正はどのような手順で行われたのであろうか。貼紙校改は最後に行われた改正に違いないが、声目字目の補正と前半の再植字とは、一度に行われたのか、或いは何等かの先後關係があるのであろうか。

後修の手順考察には、乙亥字本の翻印である日本の寛永二年（一六二五）古活字刊本との対照が有効である。古活字本は、その版式行款、本文字様の一致からして、卷十まで再植字後の、乙亥字後修本に拠ることが明らかである。ただ前稿にも指摘したように、両足院藏本の如き貼紙校改までは反映しておらず、それらの箇所では大抵、排字の異なる乙亥字初印本の本文に合致しているから、校改以前の印本を基に翻刊したことがわかる。それでは声目字目の補正についてはどうかと見れば、声目については、上下平声と上声に標示を全く欠き、去声では卷二十六至二十九、卷三十至三十二（卷三十を除く全卷）に墨罨陰刻の標目、入声では卷三十三以下の全卷に同様の標目が附されている。これは卷十一の標記を除き、むしろ乙亥字初印本の形に合致する。字目については、先に表示しておいたように、基本的には後修本の増補を反映せず、ほぼ初印本の形に等しい。但し後修本の本文整訂と排字變更に伴う字目の処置については、後修本の正誤と揆を一にしている。これは字目の補正が、本文整訂に伴う修正と其後の増補と、二つ以上の段階を踏み、古

活字本は前者のみを反映することを意味している。総じて言えば、乙亥字本には初印の後、まず巻十までの再植字が行われ、この際に若干の字目修正も施され、或いは旧態が放置された。後修本の基礎はこの時に形成され、日本の古活字本はこの段階の印本を基にしている。次で全巻に亘り声目字目の補正が加えられ、さらに修正が進み、該本印出の後に、貼紙校改を重ねて両足院本の形が成立した、と見るべきである。つまりもし、古活字本の形に等しい乙亥字本を伝存すれば、再度の修印が実証されるはずであり、声目字目の改正が行われた後の印本は、これを通修本と見なすべきである。以上の経過を図示すれば、次の如くであろう。後述の朝鮮本二種、日本の整版附訓本との関係も加えておく。

朝鮮乙亥字刊

〈尊經閣蔵本〉

← (本文整訂・字目修正)

又

〔後修〕

↓ 日本寛永二年古活字刊本

↓ 日本延宝三年刊附訓本

← (声目字目補正)

又

〔通〕修

← (貼紙校改)

↓ 朝鮮訓鍊都監字刊増刪本

〈両足院蔵本〉

↓ 朝鮮戊申字刊本

以下に〔通〕修本の伝本を補う(前出尊經閣蔵本の配本のみ)。

卷一至二、四至十五、十七至三十八配同刊初印本 朝鮮辛璉旧蔵 金沢学校印記

第三、十六巻卷を存す(三五冊のうち一冊および半冊)。黄檗染雷文繫蓮華唐草文空押艶出表紙(三三・〇×二〇・八糎)縮折(原高三四・六糎)左肩打付に「韻府群玉卷之三」と、右肩より声韻目、右下方綫外「共三十六」と書す。五針眼、改糸。以上は巻三を収めた一冊に係る。巻十六は初印本巻十五と合冊、新装に没している。毎巻首に双辺鼎形陽刻「直〱齋」、単辺方形陽刻「鷲山〱世家」、同「辛璉〱器之」朱印影を存す。

辛璉、字は器之。慶尚道靈山の人。壽堅男。朝鮮中宗十二年(一一五七)生、同三十五年進士、司果の官より明宗四年(一一四九)文科及第、諸官を経て司僕寺正に至り、宣祖六年(一一七三)歿。『明宗実録』に拠ると、同年九月十七日に羅州牧使に任じている。印文に見える「鷲山」とは、貫籍地靈山の別号であり、同鈴の印文「直齋」とは、辛氏の齋号と思われる。乙亥字刊「通」修本の印行は、両足院本の宣賜記によつて隆慶二年、即ち朝鮮宣祖元年(一一六八)以前と知られるが、その五年後に歿した旧蔵者の経歴を見ても、その年代が追認される。

また巻五第十八張後半至十九張前半、巻六第四十六張後半の本文を摸写した該本附冊の本文は、この後修本に拠っている(通修であるか否か不明)。これは版式行款のみならず本文の字様、排字の細情に至るまで合致しており、古活字本、和刻本ではなく、乙亥字後修本に拠つたと知られ、間接的ながらこれも日本への伝来を示している。その他、全冊に亘る事柄は初印本の項に前掲した。<sup>7)</sup>

同 朝鮮明崇禎再丁酉（一七二七）刊（戊申字、校書館）

翻乙亥字刊「通」修本

該本について、前稿よりなお数点の伝本調査を加えたが、右の追考によって底本の記述を改めた他は、正すべき事項を見出し得なかった。ここでは伝本の状況を列記紹介するに止めたい。

〈Columbia University East Asian Library RAREBOOK Cha 10.10〉 二八冊

丁子染草花文空押艶出表紙（三三・六×二〇・七糎）左肩打付に「韻府群玉」と、右肩より韻目、右下方「共二十八」と書す。題下打付に後筆にて「角（至軫、二十八宿）」と書す。第一・二、七・八、九・十、十四・五、十六・七、二十一・二、二十三・四、二十七・八、三十一・二、三十四・五巻を各一冊とする他は毎冊一卷。匡郭二五・二×一七・〇糎。墨批点、批圈書入、首のみ欄上墨補注、本文朱藍批点書入、極稀に朱校改を施す。首に单边方形陽刻「匹僊／堂藏」、方形陰刻「李印／最壽」、同「□／堂」茶印影、首尾冊首に单边方形陽刻不明茶印影、第一、二、十冊尾に单边方形陽刻（四隅「松・古・齋・□」）中円形陰刻「遠／傳世／程」墨印影を存す。

〈高麗大学校中央図書館晩松文庫 A二一・A八C〉

三冊

存卷二十二―二十五、二十七・二十八

丁子染蓮華唐草文空押艶出表紙（三三・五×二一・八糎）左肩打付に「韻玉十二（十三、十五）」と、右肩より韻目、

右下方綫外に「共廿」と書す。五針眼。第一冊に第二十二卷、第二冊に第二十三至二十五卷、第三冊に第二十七至二十八卷を収める。第二十二卷首匡郭二四・八×一七・一纏。墨批点書入。

〈同〉

A二一・A八E

一冊

存卷一・二

丁子染蓮華唐草文空押艶出表紙(三五・五×二三・二纏)左肩打付に「増續韻府羣玉二」と、右肩より声韻目、右下方綫外に「共三十五」と書す。五針眼。本文厚手楮紙。前後副葉。匡郭二五・二×一七・〇纏。

増續會通韻府羣玉「二十一」卷

元陰時夫編 陰中夫注 闕名增 明包瑜續 「朝鮮李希輔」會通 闕名新增

朝鮮刊(訓鍊都監字) 據乙亥字刊「述」修本

次に第四種として朝鮮訓鍊都監字刊本(訓監字本)を挙げる。この本、前述の乙亥字本を基に増編を施し、上声以下の仄声の諸卷を省略した上、訓鍊都監製作の甲寅字体の木活字を以て印出したものである。該本の増編部分は「詩譜」と称し、当該字を脚韻に用いた例句を附録したもので、韻事の実際に即した増補である。この訓監字本は伝存が乏しく、在韓の伝本のみが知られる。前稿には残欠本五本を以て著録したが、その後、高麗大学校中央図書館収蔵の晚松文庫本を全て調査した結果、前稿まで未見の数卷について著録し得た他、全編の結構について新たに見通しを得た。全編を二

十一卷と標記した点、既に前稿を改めているが、まず該本の梗概を再説する。

卷首題「増續會通韻府羣玉卷之幾(声目) / (以下低格) 晚學 陰 時夫 勁弦 編輯 / 新吳 陰 中夫 復春 編註 / 青田 包 瑜 希賢 續編」(第二十四行は首のみ)、次行低二格標「二東(獨用)」等韻目、次行より本文。体式は乙亥字本に同様である。毎韻後改行低一格にて「詩譜(双辺陰刻)」(新增)と標し、次行より小字双行二段にて「光升必自東(日)」以下例句、先ず五言句、次で七言句を列挙す。

第一卷(七五張)	上平声 一東	第十二卷(六八張)	十一眞二・十二文
* 第二卷(五〇張)	一東二(自楓)	* 第十三卷(七四張)	十三元
第三卷(六九張)	二冬・三江	※ 第十四卷(九五張)	十四寒・十五刪
※ 第四卷(八一張)	四支	※ 第十五卷(七八張)	下平声 一先 (至咍)
* 第五卷(八〇張)	四支二(自尼)	第十六卷(七六張)	一先二・二蕭
* 第六卷(七六張)	六魚 (至蘧)	第十七卷(六二張)	三肴・四豪
第七卷(七六張)	六魚二・七虞	* 第十八卷(一〇三張)	五歌・六麻
第八卷(七四張)	七虞二(自雛)	第十九卷(八〇張)	七陽
第九卷(六七張)	八齊・九佳	* 第二十卷(七六張)	七陽二(自常)
第十卷(六二張)	十灰	第二十一卷(七一張)	八庚 (至清)
第十一卷(七八張)	十一眞(至困)		

四周双辺（二四・八×一五・九糎）每半張九行、每行一七字、甲寅字体。中縫部、白口（厨接内）双花口魚尾（向対）間題「羣玉幾」、張數。卷尾題「増續會通韻府羣玉卷之幾」。

右のうち、\*号を附したものは、前稿に細情を記し得ず、今回新たに後掲晚松文庫本を以て著録した巻である。また\*号を冠したものは、前稿の著録が不十分であった点、記述を改めた巻である。該本の全編を二十一巻と著録した根拠は、伝本十種の全てが一巻に一冊を宛てており、その巻数が二十一に止まり、且つ複数の伝本の原裝表紙に全編を二十一冊と標記していることである。伝存本に拠れば本文は下平声の八庚「清」字項に至るが、これは切韻上、中途に止まるのであつて、前稿にはこれを末巻とすることが躊躇された。しかし著録の伝本から帰納する限り、「清」字を以て絶えたと考えざるを得なかつた。元来未完の編書であつたと考えたい。

以下、追録の伝本を列記して、参考に供する。

〈高麗大学校中央図書館晚松文庫 A二二・A八Dのうち〉 一八冊

存卷一六、八一十八、二十

丁子染雷文繫蓮華唐草文空押艶出表紙（三四・七×二一・七糎）左肩打付に「韻府羣玉卷之幾」と、右肩より韻目、右下方綫外「共二十一」と書す。五針眼、改糸。第一、十、十一冊前見返し熟字等注記。每冊一卷。匡郭二四・八×一五・九糎。每冊首に方形陰刻「退蔵／廬印」朱印影を存す。

〈同

三冊

存卷五、十、十五

丁子染雷文繫蓮華唐草文空押艶出表紙(三三・六×二一・〇糎)左肩打付に「増續會通韻府羣玉へ卷之幾」と、右肩より韻目を書す。五針眼、改糸。每冊一卷。第五卷首匡郭二五・〇×一六・〇糎。每冊首に鼎中单辺方形陽刻「琴／□」、每冊尾に鍾中同「洛／浦」、亀甲形双辺陽刻「鳳城／後人」朱印影を存す。欄上墨批点、本文墨補注書入。

〈同〉

一冊

存卷八

丁子染雷文繫蓮華唐草文空押艶出表紙(三三・一×二一・〇糎)左肩打付に「韻府羣玉へ□」と、右肩より韻目を書す。五針眼。前表紙紙背に有印の公文書あり、「崇禎七年十月初十日行郡主李／」「上使」記が見える。前後見返しに書込が甚しい。本文墨批点、批圈書入。末尾に五言絶句一篇を草書す。卷首右辺外に「冊主金氏(判)」、卷尾左辺外に「冊主」(判)、後見返しに「韻府群玉卷之七冊主豊山金氏家藏」「豊山金氏家藏」墨識を存す。

この冊、本文と後表紙見返しに卷序数の齟齬があつて不審を遺すのであるが、これを単純な錯誤か僚冊の表紙の流用と見れば、該本の明崇禎七年(一六三四)以後、恐らくはあまり時を隔てない時期の印出を証する。これは大略訓監字の使用時期と合致している。識語の豊山とは慶尚道、現安東市豊山の地を指す。

〈同〉

一冊

存卷十

丁子染雷文繫蓮華唐草文空押艶出表紙（二三・七×二二・〇糎）左肩打付に「新增韻玉へ□」と、右肩より韻目を書す。五針眼、改糸。第十卷首匡郭二五・〇×一五・九糎。本文墨批点書入。首に単辺方形陽刻「李浩然／雪川亭」朱印影を存す。

以上四部二十三冊は、標記の如く収蔵番号を同じくするが、伝来装訂を異にする別種本の重配である。

〈同〉 華山文庫 A二二・A八〇

二冊

存卷一、十六

後補厚手素表紙（三三・八×二二・一糎）左肩打付に「増續會通韻府羣玉卷之一（十六）」と書す。毎冊一卷。匡郭二四・八×二五・九糎。毎冊首に雷文辺欄円形中方形陰刻不明朱印影、単辺方形陽刻同、単辺方形陰陽陰刻「竹州朴／宗鉉／卿夫印」、単辺円形陽刻「朴印／宗鉉<sup>（書楷）</sup>」朱印影を存す。

朝鮮本『増続會通韻府群玉』は、李希輔を含む朝鮮中宗朝の学官達の努力によって編集された書物であったが、その編集過程は必ずしも順調ではなかったと思われ、乙亥字本二種に見られる本文の異同はそうした混乱の結果を反映している。しかし困難の末に行われた本書は、その後も特色ある二種の刊行を生んで、朝鮮朝後半の文事にしばしば用いられた模様である。また乙亥字本刊行の過程の中から印出され、いち早く日本に伝えられた一本は、近世の初め、出版興隆の時節に際し、在来の本文を押し退け古活字本として翻刊された。古活字本の流通はさほど広範とは言えないが、附訓の上、さらに覆刻され、和刻本として流布していったことを考えると、その意味は決して小さくない。また古活字本

の伝存が朝鮮本印行の失われた一過程を映し、朝鮮本刊行の精確な把握について、かえって特殊の証言を含んでいたことは、版本学上からも注目に値する。

本書のような編著の流通が、流域の学藝に及ぼした影響は、新たな著述の表面に顕れず伏在しがちであるため、端的にそれと指し示すことが、しばしば困難である。しかし書物の細情を掬い取り、交錯干渉する本文の伝承を解きほぐすことで、次第に学問知識の底辺が顕れ、さらなる構築を論ずるための一つの基盤が得られるとすれば、そうした研究は、今後とも継続される必要がある。本稿に補正し確かめられた事柄は、わずかな一斑に過ぎないが、そのような事業に資益する所があれば幸いである。

#### 注

- (1) 北京大学図書館と台北の国家図書館にそれぞれ一本を存するが、近代の転出と見られる。
- (2) 本稿では日本書誌学の用法に従い、「刊」「刊行」の語を、活字本の組成印出についても使用する。その是非について異論もあろうが、本文を整え、植字組み版の上、紙墨を以て印出する営為について、整版の刊行と同様に捉えようとの意である。
- (3) 戊申字本は現在少なくとも米國に二本、台湾に一本を伝えるが、これも近代の転出である。
- (4) 李希輔の作は『中宗実録』によると「九重深鎖月黄昏、十二鍾聲到夜分、何處青山埋玉骨、秋風落葉不堪聞」というもので、悲嘆に暮れていた燕山君は、その手を執って嘆賞したのだという。
- (5) 前稿に、同じ『中宗実録』三十五年(一五四〇)十一月二十八日癸卯の記事を挙げて(二六九頁)、領議政尹殷輔等の啓に『韻府群玉』の要を説き「合新増、而設局令能文堂上郎官主之、以大字刊出」と言って裁可を得ている記事が、『増統

会通韻府群玉』の成立に關係する可能性について述べた。本稿に紹介の記事はこれより二年後以降の事であるが、三十九年八月条の原注を見ると、李希輔に託されたのが癸卯（三十八年）春と読めるので、編集事業そのものは三十五年末頃から断続的に始められたと考えたい。

(6) 後修本卷二十四の張数について、前稿乙亥字再刊本の項（二七六頁）に「四一」と記したのは誤りである。これも併せ訂正したい。

(7) 該本の卷十六について、この巻では初印本と「通」修本を比較しても細部に亘るまで異同がなく、殆ど手が付けられなかったことがわかる。従つて改装後の半冊分がどちらに属するか、本来は不明である。ここでは鈴印の情況から卷三の僚冊と考え、「通」修本として掲出してゐる。

#### 附記

本稿は、平成十八年度文部科学省科学研究費補助金による若手研究「日本漢籍の本文形成に関する研究—五山版・古活字版を中心に—」に基づく成果の一部である。

また本稿は、平成十八年九月二十四日、同志社女子大学にて行われた、第二十五回和漢比較文学会大会に於ける研究発表「和刻本漢籍の来源」の一部に基づくものである。

圖  
版

增續會通韻府群玉

增續會通韻府群玉卷之一

晚學 陰 時夫 勁弦 編輯

新吳 陰 中夫 復春 編註

青田 包 瑜 希賢 續編

一東 獨用

東

(東) 德紅切 說文 動也 一曰春方也 漢志 一方陽

駕言祖 而 行 孟 坦腹 一 方 則 一 流 道 東 漢 鄭

馬融 辭 歸 融 曰 易 東 歸 何 曰 已 矣 本 東 乃

夏 枯 草 名 一 冬 至 活 東 模 名 一 急 就 章 曰

款 東 亦 曰 款 凍 而 生 丁 東 丁 當 珮 聲 或 謂 小 東

以其 凌 寒 而 生 丁 東 丁 當 珮 聲 或 謂 小 東

增續會通韻府群玉 朝鮮乙亥字刊初印本 卷首 尊經閣文庫藏

記

東

增續會通韻府群玉卷之一

上平聲

東	獨	貴	田	包	瑜	希賢	續編
晚	學	陰	時夫	勁弦	編輯		
新	吳	陰	中夫	復春	編註		

東 德紅切 說文 動也 一曰春方也 漢志 一方陽

氣動(記)大明生於禮器(詩)我來自東 莊(順)流而一行 坦腹 床詳來 道東 漢鄭

馬融 辭歸融曰 易東 歸何曰 已矣(爾雅)東 乃

東 夏枯草名 一冬至 活東 煖名 〇急就章曰

款東 亦曰款凍 丁東 丁當 琤聲 或謂 小東

以其凌寒而生 詩緝 東即也

增續會通韻府群玉 朝鮮乙亥字刊 [通] 修本 卷首 建仁寺兩足院藏

有 小 真 誥 大 犬 臺 宮 召 見 江 充 專 龍 淵 宮 武 紀 起	武 宮 立 季 文 子 以 米 禮 也 左 功 方 諸 宮 天 仙 上 真 之 宮	宮 前 一 宮 後 一 宮 八 十 一 夫 人 一 宮 九 嬪 一 宮 二 十	天 茅 君 博 桂 宮 太 子 初 居 竹 宮 聖 拜 禮 樂 記	公 薨 于 一 左 三 宮 仙 家 九 有 三 十 六 洞 天 岱	六 月 辛 巳 三 宮 宗 之 洞 周 迴 三 十 六 洞 天 岱
---	---	--	---	---	---

故 曰 有 犯 則 消 續 闕 宮 他 魯 頌 楚 宮 官 歸 而 作 之 名	天 文 前 日 常 在 黃 庭 經 注 漢 武 午 日 取 舊 揭 之 塗 宮 入 臂 體	宮 脾 中 央 即 黃 庭 經 注 一 都 邑 聲 宮 之 聽 則 入 民	數 里 九 成 宮 唐 改 名 一 畝 宮 之 記 黃 庭	樹 蔭 數 畝 建 章 宮 戶 周 三 十 里 萬 五 柞 宮 漢 離 宮	漢 修 垂 建 章 宮 武 作 三 十 里 萬 五 柞 宮 漢 離 宮
--	---	---	---	---	--

增續會通韻府群玉 朝鮮乙亥字刊初印本 卷 1 尊經閣文庫藏

故曰	有犯則消	美(前)文	天(前)文	日	常	中	央	即	黃	庭	經	注	漢	武	午	日	取	獨	之	塗	宮	人	質												
續	楚	宮	名	公	適	楚	好	其	官	歸	而	作	之	六	月	辛	巳	公	覺	于	一	都	邑	聲	宮	聽	一	一	則	歲	黃	庭			
數	里	九	成	宮	即	隋	仁	壽	一	畝	宮	之	儒	有	記	黃	庭	數	里	九	成	宮	即	隋	仁	壽	一	畝	宮	之	儒	有	記	黃	庭
漢	修	垂	建	章	宮	漢	武	作	千	門	萬	五	柞	宮	漢	離	宮	漢	修	垂	建	章	宮	漢	武	作	千	門	萬	五	柞	宮	漢	離	宮

大	臺	宮	召	見	紅	充	傳	龍	洞	宮	武	紀	起	長	秋	宮	奏	立	非	禮	也	左	方	諸	宮	天	仙	上	真	之	宮	室	也	高	九	千																	
左	三	宮	仙	家	九	有	三	十	六	洞	天	岱	宗	之	洞	周	桂	左	三	宮	仙	家	九	有	三	十	六	洞	天	岱	宗	之	洞	周	桂	左	三	宮	仙	家	九	有	三	十	六	洞	天	岱	宗	之	洞	周	桂
人	一	宮	九	嬪	一	宮	二	十	七	世	婦	一	武	宮	李	文	子	人	一	宮	九	嬪	一	宮	二	十	七	世	婦	一	武	宮	李	文	子	人	一	宮	九	嬪	一	宮	二	十	七	世	婦	一	武	宮	李	文	子
功	立	也	左	方	諸	宮	天	仙	上	真	之	宮	室	也	高	九	千	功	立	也	左	方	諸	宮	天	仙	上	真	之	宮	室	也	高	九	千	功	立	也	左	方	諸	宮	天	仙	上	真	之	宮	室	也	高	九	千

增續會通韻府群玉 朝鮮乙亥字刊 [通] 修本 卷 1 建仁寺兩足院藏

全澤

增續會通韻府群玉卷之十一 下平聲

二蕭 與宵 同用

蕭 蘇彫切 艾蒿 荻蒿 草白華 科生 詩 齊 馬鳴 又楚子伐一軍如挾續詳續又一齋評

蕭 翁家貧 一而食 織簾也 採蕭 彼一兮 詩 緯蕭 河

蕭 香祭 祀以脂 燭有 飄蕭 一覺素 髮 韓 清蕭 酒

蕭 秋雨 閉 八蕭 坡 蕭 蓬 事 見 下 竊 賊 藜 蕭 華

蕭 定來 聘公 享之 焉 一不 知 又 不 荅 賦 今 之

蕭 昭予 曰必 亡宴 語之 不 懷 寵 光 之 不 宣 左 今 之

管蕭 張文 樞 守 推 圭 補 并 州 參 軍 李 勣 長 活

套 管 一 艾 一 寺 詩 篇 夢 一 澤 及 姓 氏 河 南 角 音

增續會通韻府群玉 朝鮮乙亥字刊初印本 卷 11 首 尊經閣文庫藏

增續會通韻府群玉卷之十一

下平聲

二蕭與宵同用

蕭

蕭蘇彫切說文艾蒿菰蒿草白華科生詩一  
馬鳴又楚子伐一軍如挾纊詳續又一齋詳

蕭又一苞蕭浸彼一泉采蕭彼一兮詩緯蕭上  
牆詳塙

翁家食一而食織簾也烤蕭特姓取蕭祭脂  
其子乃沒川采珠詳珠

詩生民蕭作燭有飄蕭一覺素駿韓清蕭酒  
香祭祀以脂藝之

秋雨閉一八蕭威事終當繼一窻紙明坡清蕭窓  
定來聘公享之為一不懷寵光之不宣左今之

昭乎曰必亡宴語之不懷寵光之不宣左今之  
管蕭張文權字雜圭補并州參軍李勣為長活

套管一艾一寺詩篇夢一澤及姓氏河南角音  
名一四壁一

宋微子支

增續會通韻府群玉 朝鮮乙亥字刊 [通] 修本 卷 11 首  
建仁寺兩足院藏